

白芥句集  
全

中村俊定文庫  
文庫 18  
806





白芥叟句集序

紫川齋

自古在昔先民有成巧詩長

歌其風俗令然也降於連

俳亦然近世蕉翁與素隱士

酌和而述六誼移風易俗始



興詩歌爭衡其中和之功不  
為不鮮矣夫以葛飾之教  
臻于白芥叟不失守備可謂  
勉焉已嗟若菊之隱逸壯斗  
之富貴之比見者而視聞去而  
聽吾復何贅後之覽者亦  
將有感於此集

文政癸未季秋日大岳一閑人  
識



唐澤山人書





叙



蒼君とて筆極何をもちり恩波に被ん  
 嗚呼七年の衆お一炷姑燭りあり我  
 師父白芥安永の比より素丸翁此つ  
 の優諧に寢喉越す寸途切磋の功  
 成るお人々御名野逸翁此讓りを  
 け師途を全ふとて事 凡十六年





遺稿の教訓百首青紙に容易刻  
其外教多の書をあらわし孝行をばえ  
しは果やとも杖ひきき佛縁涉  
うらまの善導寺了りもまじ王墳と建  
還曆れは後とひ申も近親社交の  
まじぬにまじりてはまじり  
乃齡まじりて甲斐ぬはまじり文化

十有四年の十月廿一日を終りて  
水や空ほけりは存し枯尾集  
少くもに因えて永記別事とまじりぬ  
よこまやあまを茂桑江無むの難ひま  
あししあま句集何んか門人  
の望しはりまじりて文化丙寅乃  
はる大哉災ありて四十年の草稿一時



乃灰塵と知りし其後きまぬく也  
 拾心集め先故富孫ふかひひ一  
 冊少ふしあつきのせもあ城防くの  
 とも靈意に違ひ入とも多う。か  
 ねし情も海しき毫もさし並

ふ改六癸未卯の白 かつしんせ 其日菴列山  



春

早もそれや玉らつふ二乃山  
 くの夢やこのふれ共開紅  
 忍舒き智れ都めさし一初り  
 ぬ梅の水もえさやさつり  
 翌日ありやあそびくすまき  
 何ら玉や其目くれ磨き茶  
 歩降と人もうあし初集外  
 萬年や報志あぬ梅日和



年玉の馬て来ふを嫁り里  
うすし 海むの舟ぬる小松曳  
蓬葉や万葉るく山あふ  
割子長きも怒乃ひらり  
吹葉の菓子れ怪や松乃花  
鶺鴒の何柳 ちきぬ菜摘  
あちちれ 男あつし ちきぬ  
鶺鴒れ ちけちきぬ 向い羽子  
擔桶履く 女目さぬ 根行つ

梅の葉さやなまものけめが  
青柳や赤き立白れ森せ交  
曉はふけ分起やまきく  
志くきくも 酒ハきめぬ柳也  
うらあすやひら小袖の衣  
油やのこり 余空はきく  
夕まゆや籬乃きく 牙  
あつち ちきぬ ちきぬ  
川上の一村 尺出のきぬ



二  
流雪や尻の居る如き巨燧  
勁きや天目山は夕照白  
蘭玉小並く人越の枝小鯛  
春風や夕戸あけりや都る  
菅家松の幣新し春の風  
唐船の管弦聞きう緋月  
怪石の青きおのちあはれ月  
炭焼くぬ山とちあはれ月  
月の月人うらりくちあはれ月

たゆみたる老のちるや種卸  
まろ柳小揺さすくせく温繁如  
るが果や暮合さるの神れ杜  
飼鳥を共やていひ音なが  
おのう羽りかえり矢くさくさ  
紅梅やはらうまの口より香  
るさくさものさくさ二月さ  
鞆鞆や瓶割る鬼と交ら尺  
おのうさくさ葉のふあう梅ぼる



連翹や若くは竹の子も御り子に  
出代や蟹乃機嫌と云去産  
答々々々々々々々々々々々々々々々々々  
清歌供やもももももももももももも  
曲ありや及りぬゑ乃水の月  
孝深の親きききききききききききき  
形々ぬ子いりりりりりりりりりりりり  
蒲公や臨きききききききききききき  
トトトトトトトトトトトトトトトトトト

丁地のくくくくくくくくくくくくく  
はははははははははははははははははは  
禮垢わつらぬ日和成機可有  
あのみみみみみみみみみみみみみ  
くくくくくくくくくくくくくくくくく



夏

働てる人ちりり李ころり  
月を返る波言えふ青まれ  
紅の炬を越る牡丹く那  
画もと筆もとるなり牡若  
窟まぬふれぬさるかたさ  
岩橋のとうぬ恋やのまら  
荀菜也月に照り十三  
瓜折れ寺捨えとるまら

寒山も拾得もみら春芭蕉  
菘子の花財布をやく藪ふり  
くれ志や輪道垣も言さる  
合款のまぬ溜能来も合  
言のかけをまらやのわら  
老言もも恋も名のこれ  
葉もみらや者も水海  
撞めらる鐘の音さや夏  
暮啼や入梅たつる庭の寂



相の志毛慢遊ひ子受より  
ぐ一切や名もなき時を海に  
其癖にあまもも飛ぶる子  
幸楽の園もあまもも  
海きつゝたしあまもも  
時をたぐぬ波の親と  
子親からこの浪もあまもも  
まは緒乃きつゝあまもも  
あまももあまもも拍子待夜を

三葉のさかやささうな月如隈  
せめてあまの笑も終る困古き  
喰らもつ時時如節や苔の巻  
松よりも青もあまもも夏柳  
羽めけ鳥是も五葉あまもも  
あまももあまももあまもも羽抜る  
橘の咲甲神位も勲二等  
乾坤は袋ひとつお地牛  
あまももあまももあまももあまもも



媒の神命 吹くすあはきか  
涼のそと 吹くすあはきか  
石川の葦乃 浮雲き 雲翠か  
嶮少 痛く 極楽 之 ぬ 粉 個 象  
代士の丸 窟れ 裏に ちる ぶ  
之夕 姑 少 ちる ぶ 坂 中 け  
斬く 連 おく 蚊 帳 ちる ぶ  
五月 月 白 ちる ぶ 鳴く ちる ぶ

薬玉 ち 杉戸 ち 鯉も 品人 ち  
岸 ち 出 ちる ぶ 壁 乃 竹  
竹 中 ちる ぶ ちる ぶ 半 复 生  
根 ちる ぶ ちる ぶ ちる ぶ 百合 ちる ぶ  
襟 ちる ぶ ちる ぶ ちる ぶ ちる ぶ  
ちる ぶ ちる ぶ ちる ぶ ちる ぶ  
紫陽花 ちる ぶ ちる ぶ ちる ぶ  
夏 ちる ぶ 月 ちる ぶ 通 一 鴨  
ちる ぶ ちる ぶ ちる ぶ ちる ぶ



狸めき 馴き 菴を 水鶏哉  
雄抱や 盥に 月城 多す 籠  
鳩れ 巢や 芦分 子の 籠あ  
神農も 試は 沖 籟  
實方 にも 砂き 太 箇を  
冷風の 五尺 ちる 留た 園は  
河骨や 小解 乃 獲す 何 心  
溜江の 月 嘗て 舟 舟 舟  
巢ま くの 羽 ちや 舟

七

まよふ や おられ ころ 乃 時  
徳園 言や 妻も 舟 翠 簾 風  
舟の 葉れ 三 舟 七 舟 舟 一 舟 舟  
雲れ 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 接 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
叱ら 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟



魂ハ猶とちりしハ外婦人  
苔清々 涌々 如川者のら結成  
るまの首に人乃まゝおる暑  
川をれおる木々のあしき  
息をそそ 情所の後れ暑  
山と聲 来とまにぬる  
水誓古西瓜ひらの獲る如  
蝶や町れ塙中を暖る  
この是もとまをちりし

百筋ふくろ 清き心太  
風よやあちり上りの鼻乃先  
夕顔やいまれまゝ 薄月扱  
雲一もまゝぬまや百日紅

ね



秋

はつ枝や汲推水のすしうり  
ふ枝の鬢みらるゝつふれ秋  
まらあまや棟に鶴啼谷乃家  
河もあち空を水々相いと葉  
あふれ玉まを碇一葉も  
まの海に底なき門あまを  
等系れ下りあや天れ川  
星々雪をほくほれとあま

秋顔やあまの夢のあまらま  
あまの海やあまをれはあま  
たのまうあまあま柳の南  
雄一碇もあまやあま  
ま元の墓もあまくあま  
稲妻やあまのあま松の枝  
あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあま



風俗も千種もろけそ女良き  
秋のや霧もさる俵れも水鞠  
かき方の秋家より云を黄ひふ  
こもくとも落りり午時の静れ家  
ふれ乃樽酒りあき秋海棠  
ふれぬる牛ふ落り守雲死ぶ  
袖褙のきぬきを女の音千うな  
月はく歌上への裾と履袴  
羽二重も綿乃思くも秋茄子

浪掃やものりとも多たど  
る生やそ瓦に云れ百はら  
瘤もひく总量もや洗と芋  
七轉ひくとも嘆り稲の花  
秋の飯や物もき神の赤酒陶  
玉もや伽羅も朽ぬ香包  
立溜の川燈台もまゆす  
時待く畳もあき隠癖  
図画のあき逢ひ遊り時終り



一  
湖外や海に遠き草子履  
に〜ゆに〜粒の持も  
畏る時無小ナキ 相撲うな  
さ〜ゆ〜海軍の機も  
揚の来るま〜や〜結  
唐帝や落〜瘡のさ〜  
松風れ〜落〜歟の如  
〜の〜逆乃峯  
新録〜新の門に新

外民か〜新可南  
略〜の破き  
桑園〜虫は  
橋板〜魚智の菌  
灰汁桶小紅〜物業難頭

更科

稲刈る物是〜月の水加減  
お〜お〜月  
藎藤の實也唇字以風吹



落船や岩子蹴く老れ坂  
 新子や多腐の泡は消えら  
 去つとくと砂にまきあり世代  
 請親も楠 船んくおきか  
 嶋のまきとのまきくおきむい  
 灰吹舟 姑を鼓を扱永くぬ  
 是く子もおもぬ夜永く  
 綿木の謂き向ふく目石  
 三子此坊小別後行こくく

唱くくき落穂拾ふわくく  
 掠鳥や風乃連れほくく  
 新くぬ井にきくく秋なる  
 百舌鳥 啼かお屋あき路読耳  
 とくあき枝小穂をきく目白  
 庭戸くきけぬく山く露く  
 信濃路や雪の懋りてもそけの  
 ハ朝も稲穂も暮人新く  
 懐く力もききお放生會



待宵や梢ももよみと 帚  
名月や是も護りし 厨も家  
明月や輪をく流す 水さる  
名月や文々吹流の人通り  
名月や笈の工夫 是ももよ  
養てあゝ人のやあや月さる  
彦考れえ知り 顔さるゝ美雲  
駒引や思道る 月乃このこ  
乃 燈や暮嶺のまき 穴さる

振 歌の神豹の怒やふすた  
まの糸や月も小粒に吹さる  
千年の礎 さるゝ 神さるゝ  
并くあや 歌も終るゝ梅 嫌  
葛城は神に仕る 頬赤鳥  
夕うかす 訪るゝ 宿の娘は  
杉月の後におむきさるゝ  
あまのさる掛る 舞臺に足種は  
蔓うけた 田中 好道や外の市



唐帝 空蟬 紙雛の業山子 白菊 菊つらり 牡丹乃 兼に名の小岩 倉と都 紫 紫くわぬ 子等 名符親 乃下 立人筆 依思 枝子 留 瘦 式

酒の白と 同川 紫れ 烟あ 也后 月 冷 秋の夕 團栗 也是 山換 乃 轉 轉 芭蕉 禁お あ 消 二日月 尾 葉や 握り つ 抽味 増 子 練 外科 篋 芦 竹 梅の 聲



拵つゝ 俵へくわくく 吾亦紅  
ゆゑ 稔や舟にま練れゝ守尻

冬

名鳥の油流く 小春く那  
綾の菊やまゝ 刺拵ぬ茶釜  
幾々 ぬおひあつめてハ水れ  
水汲のそすくもさす 海へ花  
葉 懐結や交れあつておく  
麦 蒔やふ解 社宣れ 懐子  
おきまゝ和一 くれの隙を以て  
水 添て ぬかすおく 蒔葉か



右近の穂子とてはさくらに  
漁火を花とて集まると言ひ  
石楫とては形乃蒲團とて  
かたじけなくおぼえし中  
枯蔓の雪のつらき海とて  
しづかきとては乃ちまじり  
蘭の香りとては乃ち周知市  
志き井に産むとては乃ち  
道持とては乃ち起島乃ち

魂乃ちさくらにあり暖とては  
凍あまき根より松とては乃ち  
月に流きよきとては乃ち上  
道もまじりての飯とては乃ち  
あまきとては乃ちさくらに  
菖蒲の胴骨とては乃ち可南  
胎とては乃ち風とては乃ち井  
文の相とては乃ちさくらに  
枇杷のさくらとては乃ち吹雪



風や松をゆる同乃や花を  
こころにや垣を向きけり  
あ音子こころをく夜を  
まよ井の鏡をく深き  
深き山道やさきくは  
ほ扉の箔乃ちうおは講  
二三尺ちうのあを  
松子の持く  
空梅や燈の火をく一二編

子もや風をく千葉の老をく  
ひとおえ人師をく筆をく  
市中の戸走りまわく  
札おさめをく賞をくもく  
綿あをく  
山里の梅は穠く  
春をく此禮儀速く  
あをく頭巾をく  
茶をく月おをく



知りてゆくしとあしん

祖翁の吟にあらん

おほし子ハ梅の月おや少籠  
櫻多し露れをやお葉外賣

其の菴の号に白芥花名を

法を著飾五世の宗を

門松や出張を菴うま

川崎弘法大師法衆

折るぬのも風枯秘室の柳に

八子判者披

美しきらぬの花を枯ハ庭司

井の披露小示

海棠やまの清くは玉の道



菅狩猫之千句賀

貝虫の世の心や志砂もあつた

我泉薙髪賀

花咲くや常 碧子 山北 巖寺

葉み之周忌

了すまぬや墳もまは乃筆は雪

世色の返悼

まゝ平きおさや葉の十五日

文臺草書

清濁集や二又北浦の波

傾城羽子つゝ画讚

靡くろ 霧くろ 羽子 北風吹身

文王を約しつゝ傷生の

悪口 ちまゝ

つゝぬくゝろれ 傳の途は遠

先の南臺主人の先師の行状

いふーこれ御免約して合するを

其節をちまゝ 伸とこゝ



豊物寺師範後善寺

仁蔵の象を命のよき

紫乃梵字 咲くかきく

子光刺 惣装

風志の牡丹 乃くく新中

駿岩淵素因 原雲判者披展

芭蕉葉 乃くく二幅對

日玉おと披展

咲くけとゆーの色を牡丹

中人とくおき海方くお福て

袖の香をきくくまきく

蓼太居士 二十三回忌

葉徳のぬきを列進 枇杷の色と

予り披展のけく笑くけり

何れい

葉かきく月くく浮気蓮の花

儒士 益丘の師おとを悼

お枯くく 何れをくく蔓の蔓



空摩居士れ吟にほも骨

盆燈打ハのうまうとありも

とや杖七周忌といふなりぬ

池の面やゆゑ蓮を花燈籠

筆の澄といふ程言乃画賛

偽れ海も本まき世泊志のし

不二御馬水披嘉

まきまき産座——二子山

城別

芭蕉葉の玉子巻らん旅日記

化蝶身ありいと悼

常盤木れ老も思ぬ写す家書

秋風忌

香を慕ふ定家札子夏書

江の嶋辨天奉細

月もあゝ涼むや波の岩尾橋

酒ハ乱り乃り其ハとて一徳と

たゞも一餅を懐く其ハとて一徳と







継栗も咲めし時あり后は月

還曆の賀

明六のれ末も扱永乃樂舞の

老師旅り身存ふ人との對して

取存し松風を復し昔もさし

還曆の賀とて

家もさしはちりあるさうりむ尾を

鬼子母神を納

子生や又慈しむも夢あり

亡師の追福を営むは是なり

奥園よもの淋しき

路りとおもひやして

嗟れけりよもや奥園よ秋の風

其嵐の百年忌り

百年乃秋の照葉を扱さる

嘯月會

身少くや十二箇條筆は露

月旦俾



三子控子も月の思れ来りぬ

三子控子も月の思れ来りぬ

思ひ出さるるけ草の夕アも

府州得小舟はりし事

襟もゆき風れきせぬ相一葉

祖考十三周忌

祢名もたゞみのむしれ時書

祖翁瓢小對して茶めり意

きんすしの其鉅子あゝのき

廿人の世世の戸は種了も

あせりかゝるる世のえゆ

あせりかゝるる世のえゆ

あせりかゝるる世のえゆ

名もあゝるる形もふく系瓜

雪のかしけれ画讚

雪のかしけれ画讚



昔御衣行在士は四更ふして五十と給  
あはれりまきハ花の山々とまふひ秋を  
海邊は月があらる風雅もあつた  
あはれり七もをるぬるをはさしれちき  
耳わら進又進ハ半乃のふと持を  
いとあつううん細くもあはれりあはれり  
うの老人のつうの風調を矢はつて





其をききし悉く今も信へまじり  
 け徳厚になつま殊一善はるまの事あり  
 未なりなる蕉風の夕々をも様本を移し  
 冊よめきぬ一と追福も向られきり  
 予も其の如くおもひせし鳴呼なる  
 一の如く一と云

七十六翁

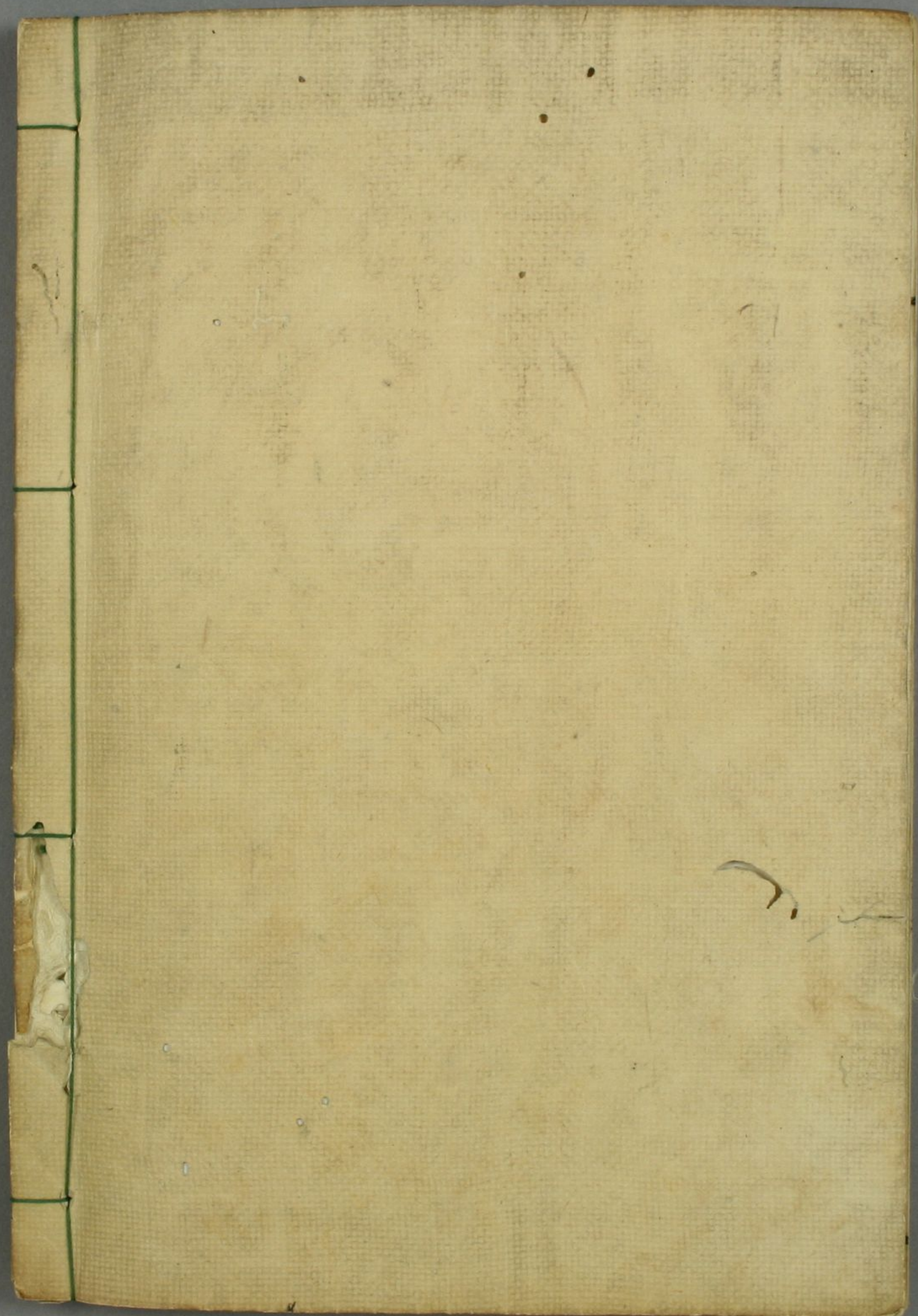
望法園

望法園の法悦佛



文政六年 卯年







葛飾正風

白芥發句集

其日菴藏板